

幼稚園・家庭・地域社会の連携からみた幼稚園バスにおける保育者の役割につ

いてー遊びへのかかわりをめぐってー

浅野由子

(日本女子大学大学院)

I 研究目的

日本社会では、1960年代後半の高度経済成長による都市化、核家族化の進行が、伝統的な家族制度（複合家族）と地域社会の機能を弱体化させた¹⁾。このことから、それまで学校と家庭と地域社会の連携がとれていた為に、問題が少なかった育児環境（親子関係）にも大きな変化が見られるようになったと言えよう。小川博久はその変化について以下のように述べている。まず家庭においては、核家族化や消費文化化の影響により、モノとのかかわりが欠除し、親と子の共同作業がなくなり同調性が欠除した結果、親から子への命令的關係が増大した²⁾。次に地域社会においては、都市化の影響により以前は子どもの遊び場であった道路や近隣の空間がなくなり、さらに情報化や少子化によって子どもは孤立化し、かつて地域において見られた子どもの異年齢集団の遊びは見られなくなった³⁾。更に学校においては、1960年代以前の学校に成立していた3つの文化的価値体系（学業の文化・遊びの文化・労働の文化）が、それ以降の学校においては、学業文化を構成するシステム（教授－学習）関係が肥大化し、子どもの遊びの文化は矮小化され、子どもたちはすべての面で大人に管理される傾向が増大した⁴⁾という。このことから、現在の日本の育児環境（親子関係）は、学校・家庭・地域社会の機能を十分発揮できず、連携がとれない状況にあることから、子育て不安といった育児問題が浮上してきている状況にあるといえよう。

このような社会的状況をうけて、平成十年度の中教審答申では、家庭における親と子の自立した関係の確立が困難になりつつあるという認識から、家庭保育の見直しと施設保育における遊び中心の保育の重視が掲げられ、父母が施設保育での活動に共感し、参加することを通して、子育てへの不安を解消するといった方

策が打ち出された。また平成十一年度の幼稚園教育要領では、遊び中心の保育と教師の指導力について強調された。このことから、現在、子育てや幼児の生活（遊び）における幼稚園・家庭・地域社会の連携を考える上で、幼稚園が果たしていく役割は大きいといえる。しかし、実際にそのような連携を可能にする幼稚園側からの具体的な試みは今だ発信されていない。

筆者は修士論文において、ある幼稚園における幼稚園バスの車中において、子どもの遊びが充実している様子が見られたことに着目した。今まで幼稚園・家庭・地域社会の連携がとれていた時代においては、幼稚園バスは親と子のコミュニケーションの機会を奪い、子どもを家庭や地域社会から一方的に離し、連携を壊すという理由で否定的に考えられてきた。しかし、学校・家庭・地域社会の連携がなくなりつつある現代社会において、上述の例のように、幼稚園における豊かな「遊び」が幼稚園バスにおいても見られ、その「遊び」が家庭や地域社会においても再現されるのであれば、幼稚園側から幼稚園バスを通して家庭や地域社会との連携を深めていく新たな試みとして注目することが出来ると仮定したのである。そして調査の結果、幼稚園バスにおいて、幼稚園における豊かな遊び（特に言葉遊び、歌、手遊び）が展開されることが実証された。また特に、バス内における大人（保育者・運転手）の行動や言動に子どもが同調して遊びが始まり、更にそれが契機となって笑いが起こり、バス内での集団性が強まるといった傾向が見られた。従って、バス内における大人の言動や行動は、子どもの道徳性や社会性そして自発的に遊びを展開していく援助行動としても重要であることが明らかとなった⁵⁾。

このような修士論文での成果を踏まえ、本研究では幼稚園バスにおける保育者の役割（援助行動）の可能

性について考えてみたい。修士論文の結果から幼稚園バスでの遊びにおいて、幼稚園での豊かな遊びが展開されることが多かったことから、保育者は幼稚園と家庭と地域社会の連携を考える上では、幼稚園バス内での環境を、幼稚園の延長としての保育空間と捉え、その活動を extracurriculum として把握する必要があるといえる。それゆえ、幼稚園バスの中での幼児の遊びについて保育者がどういう意識をもっているかによっても、子どもの遊びに大きな相違が生まれることが予想される。そこで本研究では、幼稚園バスの幼児の遊びに対する保育者の意識をインタビューによって明らかにするとともに、幼稚園および幼稚園バス内での保育者の言動および行動を観察し、又、周囲の子どもの実態も観察することにより、幼稚園バスにおける保育者の援助行動の可能性について考えてみたい。

II 研究方法

対象園 山形県私立 M 幼稚園

対象の教師 年長児クラス女性教諭 2 名（チームティーチング制）－K 教諭、O 教諭

対象クラス 年長児クラス

対象バス 大型バス（約 40 名乗り）①②番バス

小型バス（約 10 名乗り）③④番バス

観察期間 2003 年 12 月～2004 年 3 月（3 学期を中心として）

観察方法 インタビュー調査およびビデオ観察

インタビュー調査：クラス担任 2 名に幼稚園バスの子どもの遊びに対する見解をインタビューする。

ビデオ観察：保育時間および幼稚園バス内での保育者と子どもたちの様子を VTR に録音する。

III 結果

事例① 2003 年 12 月 21 日（月）

インタビュー調査

対象教師 K 教諭（経歴 5 年目）O 教諭（経歴 4 年目）

K 教諭－異年齢でよく行われているという意味で、幼稚園バス内で行われる遊びは重要と考えている。

O 教諭－幼稚園で行われた遊びが幼稚園バスで行われた場合は好意的にそれらを受け止め、子どもからの要請があった場合には、積極的にそれらの遊びを楽しむようにしている。

ビデオ観察

保育 お集まりの際、K 教諭が主に絵本の読み語りや手遊び、配布物の点呼などを行う。O 教諭は 2 学

期に子どもが作った製作物の配布や帰りのご挨拶を中心に行う。

幼稚園バス 大型バス①K 教諭 大型バス②O 教諭

大型バス① 男児 R・N がジャンケンを始めると、その前にいた女児 Y が仲間に入り、3 人で手遊びをして笑いあう。R は T に N が手を怪我していることや自分の誕生日はどこで行うかを当てる質問をして、話しかける。T はそれに対し、親切に受け答え、R と会話を楽しむ。

大型バス② T は男児 Y が歌っている歌について、また女児 M が持っている所持品について、積極的に質問をする。またバス内に落ちているモノ（子どもの製作物や所持品）を拾い、モノを介して子どもと会話をする。子どもから手遊びやクイズの勧誘を受け、子どもたちと共に楽しむ。

IV 考察および結論

インタビュー調査の結果から、K 教諭は子どもの遊びについて受動的で、O 教諭は逆に積極的な考えであることを伺い知ることが出来た。そのような認識の違いが、保育においても幼稚園バス内においても持続して言動や行動に表れることがビデオ観察によって明らかにされた。

V 今後の課題

今後も継続して、インタビュー調査およびビデオ観察を行っていく。特に、教師が保育での幼児理解を幼稚園バスにおいても連続して行っているかどうか。またその理解を継続して次の日の保育に生かしているかどうか。またそういった理解を父母との連携に生かしているかどうか等について考察する。そして、教師の心理および行動の変化とそれに伴う子どもの心理および行動の変化の相関についても、考察する。

<参考および引用文献>

- 1) 佐藤守『都市化と幼児教育』創文社 1979
- 2) 小川博久 「今日の乳幼児の危機と保育の課題」日本保育学会紀要 2002
- 3) 小川博久 環境情報科学 27 号-3 1998
- 4) 小川博久編著『「遊び」の探求－大人は子どもの遊びにどうかかわりうるか－』終章 われわれ大人は子どもの遊びにどうかかわりうるか 四、学校生活と遊びとの関係』生活ジャーナル 2001 p 294～p 300
- 5) 浅野由子 「遊びが持続する環境についての研究－幼稚園バスにおける子どもの遊びを通して－」日本女子大学大学院 2002 年度修士論文